

いちばん、人を考える会社になる。

第一生命

2011年3月期 第2四半期決算報告

2010年11月12日
第一生命保険株式会社

- それでは、第一生命グループの2011年3月期 第2四半期決算報告を行います。
- まず、私から資料に沿って決算内容についてご説明させていただき、残りの時間を質疑応答とさせていただきます。
- 1ページをご覧ください。

- 中核事業の営業指標の改善が続く。主力商品の販売が好調で、第一生命単体の新契約高は前年同期比で10.5%増加。解約失効高は同29.0%減少
- 第一生命単体の保険料等収入の増加、ヘッジ目的の金融派生商品に係る収益が経常収益に寄与。上記契約業績の改善に加え事業費削減も進み、第2四半期業績は期初予想を大幅に上回った
- リスク性資産の圧縮が進み、ソルベンシー・マージン比率も上昇するなど財務健全性の強化に向けた取組みが前進。資本再構築により新ソルベンシー・マージン規制にも対応

- 決算のポイントはご覧の3点となります。
- 1点目として、中核事業の営業指標の改善が続いています。主力商品や一時払い保険商品の販売が好調だったことから、第一生命単体の新契約高は前年同期比で10.5%増加しました。また、解約失効高は前年同期比で29.0%減少しました。
- 2点目として、第2四半期業績は期初予想を大幅に上回りました。営業指標の改善に加え、事業費削減も進みました。これを受け、10月29日に業績予想の修正を発表いたしました。
- 3点目として、財務健全性に向けた取組みが成果を現しました。リスク性資産圧縮のオペレーションが順調に進み、9月末のソルベンシー・マージン比率は1022.5%にまで改善しました。10月初旬には資本再構築の一環として期限付劣後借入を永久劣後借入へ条件変更するなど資本規制強化の動きにも対応しました。
- 次に2ページをご覧ください。

	(億円)			<参考>			
	10/3期 2Q累計	11/3期 2Q累計	増減率	5/14発表 上期予想	達成率	通期予想	進捗率
経常収益	27,483	22,626	18%	21,030	108%	43,260	52%
第一生命単体	21,425	20,943	2%	19,310	108%	39,720	53%
経常利益	1,346	1,010	25%	740	137%	1,950	52%
第一生命単体	1,358	1,062	22%	810	131%	2,090	51%
中間純利益 ⁽¹⁾⁽²⁾	505	294	42%	110	268%	500	59%
第一生命単体	518	341	34%	170	201%	620	55%

(1) 前年同期との比較を可能にするため、10/3期2Q累計については、11/3期2Q累計と同様に契約者配当準備金繰入額を計上したと仮定し、10/3期に計上した契約者配当引当金繰入額925億円に1/2を乗じた金額を、中間純剰余より控除しています。

(2) 第一生命は10/3期2Qにおいて相互会社でありましたが、中間純剰余に代えて中間純利益と記載しています。

- 連結主要業績はご覧のとおりです。
- 前年同期との比較については、後ほど詳細にご説明致しますので、ここでは<参考>として掲載している会社予想との比較でご説明いたします。
- 第一生命において、営業職員チャネルを通じた保険商品の販売が好調であったことに加え、契約の質の改善も進み解約失効が減少した結果、保険料等収入が期初予想を上回って推移しました。また、厳しい運用環境において機動的なヘッジを行ったことにより、連結経常収益は期初予想を上回りました。
- 連結経常利益、連結中間純利益についても、第一生命における営業業績の好調や事業費の削減により、期初予想を大幅に上回りました。結果、いずれの指標も5月14日に発表した上期の業績予想を上回り、また通期業績予想に対しても高い進捗率を達成しました。
- 次に3ページをご覧ください。

第一生命

連結損益計算書・連結貸借対照表(要約)

連結損益計算書(要約)⁽¹⁾

連結貸借対照表(要約)

(億円)			
	10/3期 2Q累計	11/3期 2Q累計	増減
経常収益	27,483	22,626	4,856
保険料等収入	19,499	16,651	2,847
資産運用収益	6,534	4,580	1,953
うち利息・配当金等収入	3,460	3,382	78
うち有価証券売却益	1,182	1,017	165
うち金融派生商品収益	56	148	+91
うち特別勘定資産運用益	1,791	-	1,791
その他経常収益	1,449	1,394	55
経常費用	26,137	21,615	4,521
うち保険金等支払金	12,976	12,638	338
うち責任準備金等繰入額	7,340	2,722	4,618
うち資産運用費用	1,286	2,070	+784
うち有価証券売却損	652	618	33
うち特別勘定資産運用損	-	937	+937
うち事業費	2,393	2,158	235
経常利益	1,346	1,010	335
特別損益	134	106	+28
契約者配当準備金繰入額 ⁽¹⁾	462	412	50
税金等調整前中間純利益 ⁽²⁾	749	492	256
法人税等合計	245	204	41
少数株主利益(は損失)	1	6	4
中間純利益 ⁽²⁾	505	294	211

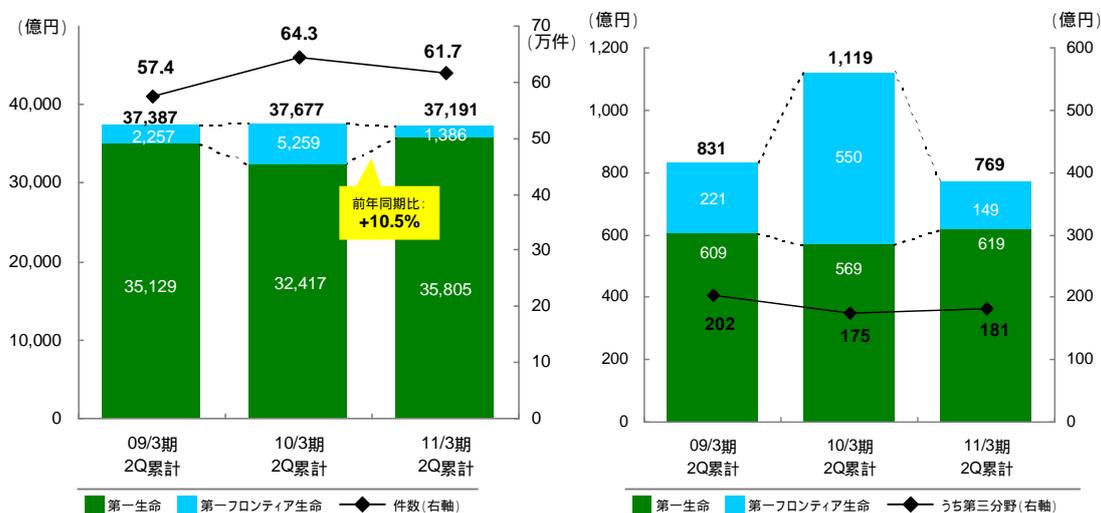
(億円)			
	10/4始	10/9末	増減
資産の部合計	321,042	320,541	500
うち現預金・コール	4,373	3,874	498
うち買入金銭債権	2,898	3,092	+194
うち有価証券	251,473	253,835	+2,362
うち貸付金	38,349	37,652	697
うち有形固定資産	12,440	12,862	+422
うち繰延税金資産	3,395	3,506	+111
負債の部合計	311,400	311,165	235
うち保険契約準備金	292,047	294,505	+2,458
うち責任準備金	286,326	288,992	+2,665
うち退職給付引当金	4,114	4,206	+92
うち価格変動準備金	1,155	1,225	+70
純資産の部合計	9,641	9,376	265
うち株主資本合計	5,587	5,793	+206
うち評価・換算差額等合計	3,936	3,469	466
うちその他有価証券評価差額金	4,622	4,170	452
うち土地再評価差額金	635	647	11

(1) 前年同期との比較を可能にするため、10/3期2Q累計については、11/3期2Q累計と同様に契約者配当準備金繰入額を計上したと仮定しています。具体的には、10/3期に計上した契約者配当引当金繰入額925億円に1/2を乗じた金額を、契約者配当準備金繰入額として記載しています。

(2) 第一生命は10/3期2Qにおいて相互会社でありましたが、中間純剰余に代えて中間純利益と記載しています。

3

- 主要収支の詳細をご説明します。
- 連結経常収益は、前年同期と比べ4,856億円減少し、2兆2,626億円となりました。保険料等収入が前年同期と比べて2,847億円減少したことが主な要因です。前年同期において第一フロンティア生命の販売実績が特殊要因により大幅に増加していたことの反動として減少となりましたが、リスク管理の観点から商品ポートフォリオを調整し、上半期の販売はほぼ計画並みに推移いたしました。
- 前年同期に計上した特別勘定資産運用益が、今期は運用損となったことも連結経常収益を押し下げておりますが、これは責任準備金の繰入れもしくは戻入れでそれぞれ相殺されるため、連結経常利益に影響するものではありません。
- 連結経常利益は、前年同期と比べ335億円減少し、1,010億円となりました。運用環境の悪化により逆ざやが拡大したことに加え、有価証券売却益などキャピタル損益が前年同期比で減少したことが主な要因です。
- 連結経常利益に、特別利益、特別損失、契約者配当準備金繰入額、法人税等合計、少数株主損失を加減した連結純利益は、前年同期と比べ211億円減少し、294億円となりました。
- 次に4ページをご覧ください。

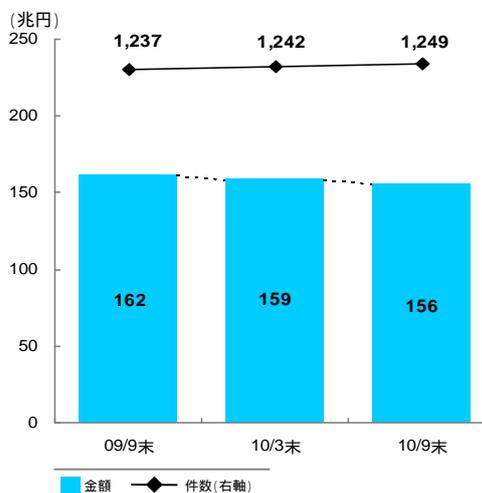
新契約高⁽¹⁾新契約年換算保険料⁽¹⁾

(1) 第一生命と第一フロンティア生命の合算ベース

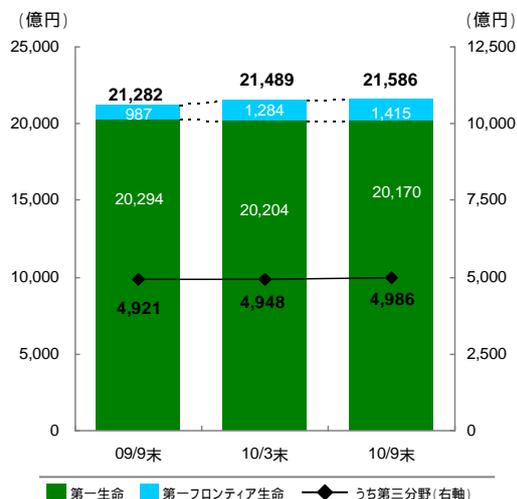
4

- 契約業績の状況についてご説明します。こちらは、第一生命と第一フロンティア生命を合算した数値となります。
- 左のグラフは、個人保険・個人年金保険合計の新契約高の状況です。第一生命の新契約高は、株式会社化に伴うお知らせ訪問活動や、営業職員の育成強化の効果などにより、第1四半期のモメンタムを失うことなく、前年同期比10.5%増と二桁の増加ペースを維持しております。反面、第一フロンティア生命の新契約高は、先にも触れた特殊要因からの反動により減少しました。この結果、両社合計の新契約高は前年同期比1.3%減の3兆7,191億円となりました。
- 次に、右のグラフですが、新契約年換算保険料は、同様の要因により第一生命が増加したものの、第一フロンティア生命が減少した結果、両社合算では前年同期と比べ31.2%減少し、769億円となりました。このうち、折れ線で示しております第三分野は前年同期と比べ3.7%増加しました。
- 次に5ページをご覧ください。

保有契約高⁽¹⁾



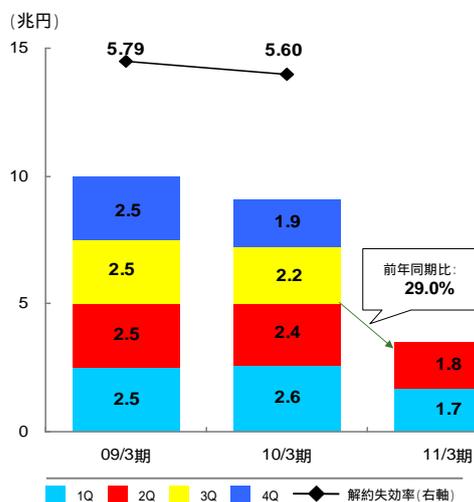
保有契約年換算保険料⁽¹⁾



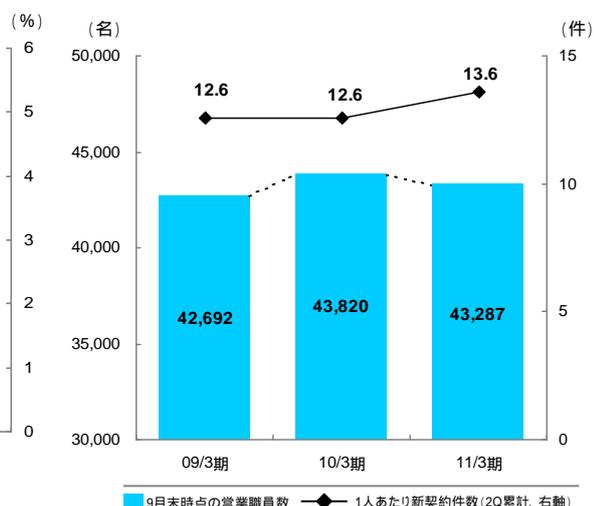
(1) 第一生命と第一フロンティア生命の合算ベース

- 保有契約の動向についてご説明します。
- 左のグラフの保有契約高は、前年度末と比べ1.8%減少し、156兆円となりました。折れ線で示しております保有契約件数は前年度末と比べ増加しました。
- 次に、右のグラフですが、保有契約年換算保険料は、前年度末と比べ0.5%増加し、2兆1,586億円となりました。このうち、折れ線で示しております第三分野は4,986億円となり、堅調に推移しております。
- 次に6ページをご覧ください。

解約失効高(個人保険・個人年金保険)⁽¹⁾



営業職員数および生産性⁽¹⁾⁽²⁾

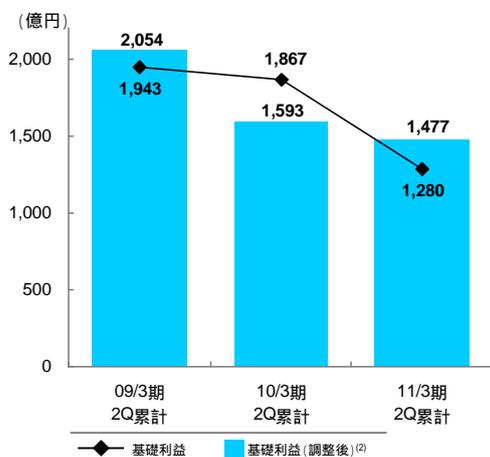


(1) 第一生命単体ベース

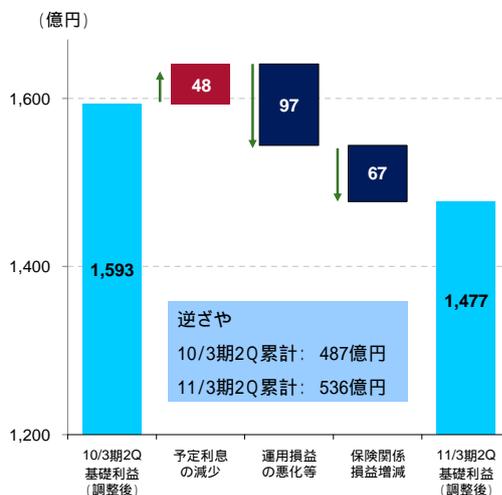
(2) 営業職員については、第一生命と委任契約を締結しかつ生命保険募集人登録をしている者のうち、その他補助的業務に従事する者を除いております。

- 左のグラフは第一生命単体の解約失効高並びに解約失効率の状況を示しております。第2四半期累計の解約失効高については、営業職員チャネルの人財育成の効果が現れていることに加え、株式会社化に伴うお知らせ訪問活動の効果等により、前年同期比29%減と大幅に改善しました。
- 右のグラフは、営業職員数とその生産性を示しています。営業職員数は前年と比べ微減となっておりますが、4万人台をキープしながら、営業職員チャネルの競争力強化に向けた質の向上が着実に進んでおります。
- 次に7ページをご覧ください。

基礎利益⁽¹⁾



基礎利益 (調整後) の変動要因^{(1) (2)}



(1) 第一生命と第一フロンティア生命の合算ベース

(2) 基礎利益 (調整後) = 基礎利益 + 変額年金の最低保証リスクに係る責任準備金繰入額

■ 基礎利益についてご説明します。

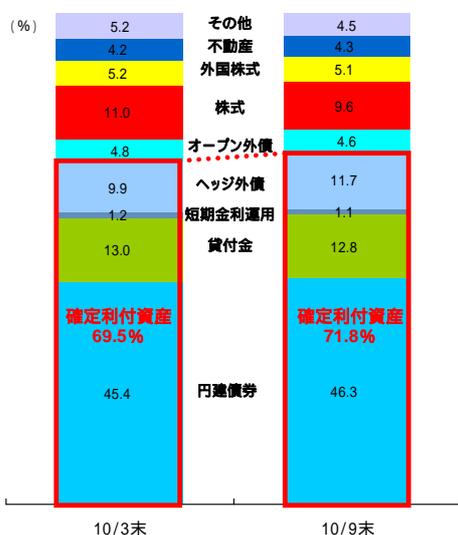
■ 左のグラフの折れ線で示しております第一生命と第一フロンティア生命合算の基礎利益は大きく減少しておりますが、これには変額年金の最低保証リスクに係る責任準備金がノイズとして影響しています。この影響を除いた基礎利益を棒グラフで示しておりますが、ノイズ修正後の基礎利益は、前期と比べ116億円減少し、1,477億円となっています。

■ 右のグラフは、変額年金の最低保証リスクに係る責任準備金繰入れの影響を除いた基礎利益の変動要因を示しております。追加責任準備金の積立てに伴う予定利息負担軽減等が48億円の増加要因となった一方、運用損益の悪化等で97億円減少、その他保険関係損益の低下で67億円減少となっています。

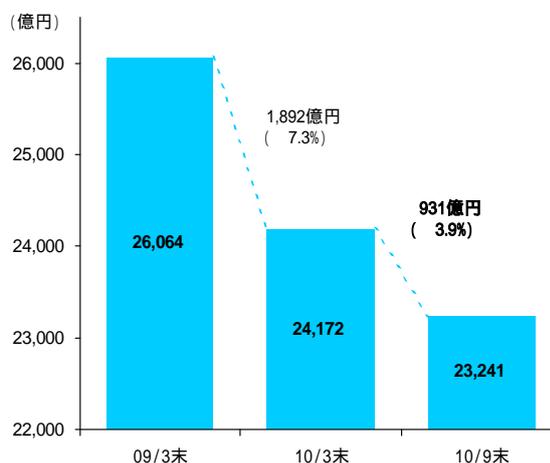
■ 次に8ページをご覧ください。

一般勘定資産の状況

資産の構成(一般勘定)⁽¹⁾



国内株式の簿価⁽¹⁾⁽²⁾



(1) 第一生命単体ベース

(2) 国内株式のうち時価のあるもの(子会社・関連会社株式、非上場国内株式は除く)

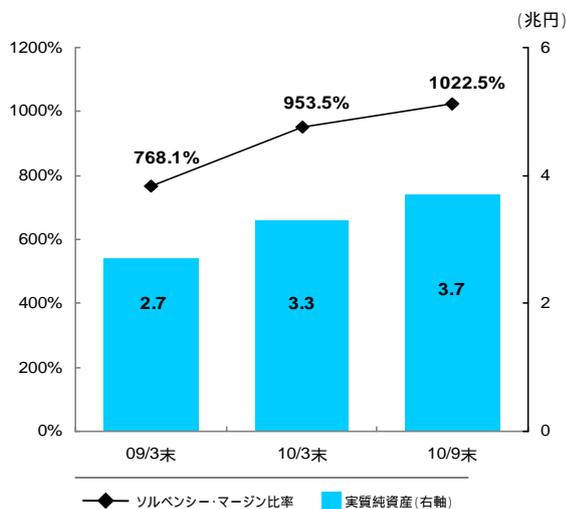
- 資産運用の状況についてご説明します。
- 左のグラフをご覧ください。第一生命の一般勘定資産の構成比を示しております。
- 引き続き、ALMと厳格なリスク管理の考え方に基づいて、円建公社債や貸付金などの確定利付資産中心の運用を継続しています。
- 一般勘定資産における国内上場株式のエクスポージャーは9月末で9.6%と10%を切る水準まで低下しました。右のグラフに示しております株式エクスポージャーの削減は市場が不安定な環境下においても順調に進捗いたしました。リスク性資産圧縮のオペレーションはこれまでお伝えしている通り、下半期に本格化させる計画です。
- 次に9ページをご覧ください。

含み損益(一般勘定)⁽¹⁾

(億円)

	10/3末	10/9末	増減
有価証券	8,514	12,317	+3,802
国内債券	2,657	9,491	+6,834
国内株式	5,225	2,033	3,192
外国証券	598	703	+104
不動産	908	711	197
その他共計	9,420	13,016	+3,596

ソルベンシー・マージン比率および実質純資産額⁽¹⁾



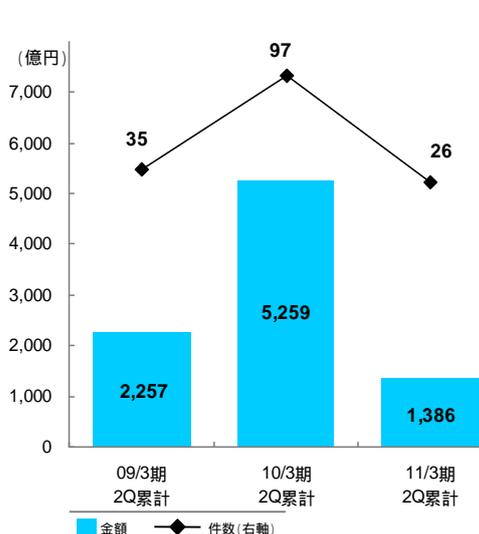
(1) 第一生命単体ベース

- 第一生命の健全性指標についてご説明します。
- 左の表の含み損益は、金利の低下による国内債券の含み益の増加等により、前年度末と比べ3,596億円増加しました。
- また、右の折れ線グラフのソルベンシー・マージン比率は、株式残高の減少に加え、金融環境悪化に備えた金融派生商品のヘッジポジション積み増しにより、資産運用リスクが減少した結果、前年度末と比べ69ポイント上昇し、1022.5%となりました。
- 次に10ページをご覧ください。

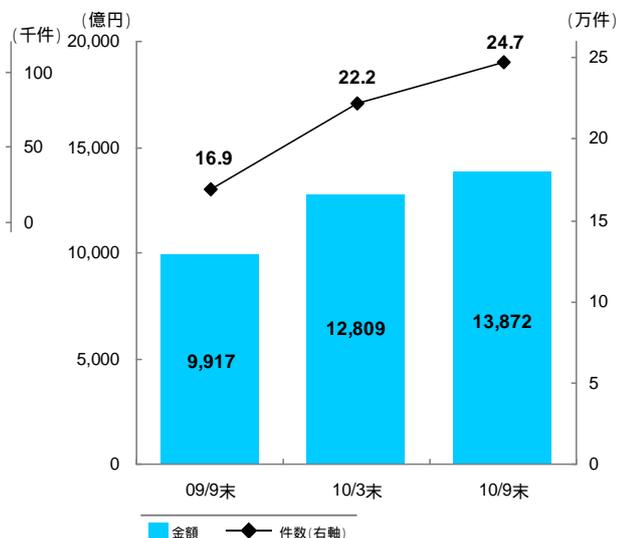
第一生命

第一フロンティア生命

新契約高



保有契約高



10

- 第一フロンティア生命の状況についてご説明します。
- 左のグラフをご覧ください。新契約高は、前年同期と比べ減少し、1,386億円となりました。これは、前年同期の販売実績が特殊要因、---即ち、競合他社の変額年金事業からの撤退等により、第一フロンティア生命を含む特定の保険会社に販売が集中したことです。--- こうした特殊要因で前年同期の新契約高が大幅に増加していたことの反動によるものです。今年度はリスク管理の観点から商品ポートフォリオを調整し、上半期の販売は計画並みに進んでおります。
- 右のグラフの保有契約高は順調に増加し、1兆3,872億円となりました。
- 今後も、個人年金市場の中長期的な成長性を見据えながら、安定的に残高を積み上げてまいります。
- 次に11ページをご覧ください。

第一生命

第一フロンティア生命

収支の状況

(億円)

<参考>

	10/3期 2Q累計	11/3期 2Q累計	11/3期 上期予想
経常収益	6,070	1,666	1,700
うち保険料等収入	5,533	1,616	
うち変額年金	4,883	1,236	
うち定額年金	358	147	
うち資産運用収益	533	50	
うち最低保証リスクに対するヘッジ利益(A)	-	39	
経常費用	6,100	1,731	
うち責任準備金等繰入額	5,624	1,081	
うち最低保証リスクに係る責任準備金繰入額(は戻入)(B)	246	184	
うち危険準備金繰入額(C)	237	10	
うち資産運用費用	36	187	
うち最低保証リスクに対するヘッジ損失(D)	34	-	
経常利益(は損失)	30	64	80
当期純利益(は損失)	30	61	80
当期純利益 - (A) + (B) + (C) + (D)	4	94	

- 第一フロンティア生命の収支の状況についてご説明します。
- 経常収益の減少は、冒頭から説明している要因で保険料等収入が減少したことと、金融市場環境の悪化により、特別勘定資産運用益が今期は運用損となったことなどによるものです。また、前年同期は戻入れ益が発生していた最低保証リスクに係る責任準備金が今期は繰入れに転じたこともあり、中間純損失は61億円に拡大しました。
- 表の最下段に、市場変動要因を除いた、変額年金の最低保証リスクに係るヘッジ損益及び責任準備金繰入れや負債性の資本である危険準備金への繰入れを調整した、第一フロンティア生命の基礎的収益力とも言える数値の推移を記載しております。基礎的収益力は、第1四半期に続き、改善を見せております。
- 次に12ページをご覧ください。

2011年3月期業績予想(期初予想から変更なし)

(億円)

	10/3期	11/3期(予)	増減
経常収益	52,940	43,260	9,680
第一生命単体	43,315	39,720	3,595
第一フロンティア	9,613	3,500	6,113
経常利益	1,882	1,950	+67
第一生命単体	1,936	2,090	+153
第一フロンティア	83	160	76
当期純利益	556	500	56
第一生命単体	608	620	+11
第一フロンティア ⁽¹⁾	76	144	67
1株当たり配当金	-	1,600円	-

() 上記とは別に、組織変更時の定款附則第2条の規定に基づき2010年4月16日を基準日として、第1回株主配当(1株当たり1,000円)を実施しました。

(参考)

基礎利益 (第一生命単体)	3,301	3,000弱	-
------------------	-------	--------	---

(1) 持分考慮後

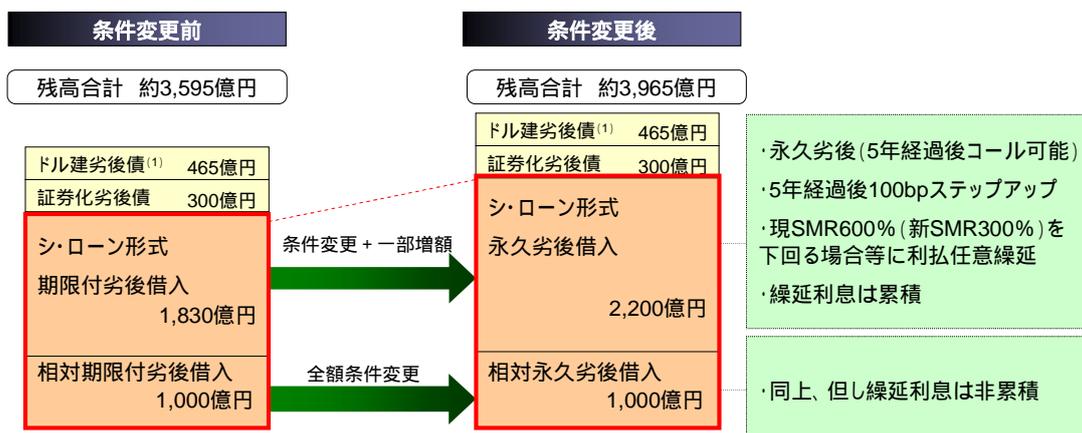
- 2011年3月期の業績予想について説明します。
- 第一生命の保険料等収入や金融派生商品収益の増加によって、第2四半期の連結業績は期初予想を大幅に上回り、第2四半期の業績予想を上方修正するに至ったことはすでに説明いたしました。
- しかし、依然として金利、為替、株価など金融環境は厳しい状況にあり、下半期の見通しに関しては依然、変動要素が多いのが現状です。このため、通期予想については従来予想を据え置くことにしております。
- 次に13ページをご覧ください。

第一生命

資本の再構築(期限付劣後借入の永久劣後借入化)

新ソルベンシー・マージン規制等を踏まえ、新SMRでの資本算入が可能な永久劣後借入(3,200億円)への大規模な再構築を実現

永久、かつ利払繰延条項等を付すことで、新SMR上の「特定負債性資本調達手段」の要件を満たすとともに、経済価値ベースでの資本水準向上にも寄与
株式の希薄化は伴わない設計とし、適正な資本コスト・資本構成を追求



(1) 2010年3月末の為替レートで換算。

- ここでは、2012年3月末から導入される新ソルベンシー・マージン規制を踏まえた資本政策上の取組みとして最近行った、資本再構築について、説明させていただきます。
- 9月27日に期限付劣後借入を永久劣後借入に条件変更することを発表しましたが、10月8日に手続きが完了しました。これにより、3,200億円が新ソルベンシー・マージン規制における「特定負債性資本調達手段」の要件を満たすことになりました。具体的な水準についてはコメントできませんが、株式の希薄化を伴わず、かつ有利な条件で資本再構築ができたことを報告させていただきます。
- 次に14ページをご覧ください。

第一生命

ヨーロッパ・エンベディッド・バリュー

第一生命グループのEEV (億円)

	10/3末	10/9末	増減
EEV	28,363	21,423	6,939
修正純資産 ⁽¹⁾	18,214	20,516	+2,301
保有契約価値 ⁽¹⁾	10,148	907	9,240

	10/3期 上半期	11/3期 上半期	増減	10/3期 年間
新契約価値	333	472	+138	1,189

第一生命単体のEEV

	10/3末	10/9末	増減
EEV	28,680	21,989	6,691
修正純資産	18,809	21,141	+2,332
保有契約価値	9,871	847	9,024

	10/3期 上半期	11/3期 上半期	増減	10/3期 年間
新契約価値	490	475	14	1,356

第一フロンティア生命のEEV

	10/3末	10/9末	増減
EEV	1,463	1,187	275
修正純資産 ⁽¹⁾	1,155	1,120	35
保有契約価値 ⁽¹⁾	307	67	240

	10/3期 上半期	11/3期 上半期	増減	10/3期 年間
新契約価値	173	3	+169	185

(1) 第一フロンティア生命は、新契約の初期コストの未回収リスクの軽減を目的として、修正共同保険式再保険等の再保険を活用していますが、当該再保険に係る調整を10/9末より行っています。本調整は修正共同保険式再保険等に係る将来の償却コスト相当額を保有契約価値から修正純資産へ振替えたものであり、EEVの総額には影響しません(第一フロンティア生命の修正純資産への影響額は466億円、保有契約価値への影響額は466億円です。グループベースでの影響額は出資比率に応じ、90.0%となります。)、10/3末についても、新基準で計算し直した比較可能なベースで掲載しています。

14

- 最後に、2010年9月末のエンベディッド・バリューについて説明します。未だ第三者の意見を頂いていないため、要約での開示となりますが、9月末のグループEVは2兆1,423億円となり、3月末に比べ6,939億円の減少となりました。金利低下を受けて保有契約価値が大幅に減少しました。修正純資産では株式の価値は減少しましたが、債券価格の上昇で相殺され、2,301億円の増加となりました。
- 本日のEVのプレスリリースの脚注にもあるように、第一フロンティア生命のEVは、2010年9月末から算出基準を変更しております。第一フロンティア生命の販売する年金保険については、初期コストの未回収リスクを軽減するため、修正共同保険式再保険などの再保険を利用しています。簡単に言えば、契約初期の費用負担を繰延べる効果を再保険によって実現しています。従来算出基準では、契約獲得時に受け取った新契約出再手数料を修正純資産に計上し、将来の償却コスト相当額は保有契約価値から控除していました。しかし、それでは保有契約の持つ本来の価値を的確に表示しているとは言えないのではないかと議論もあり、検討を重ねた結果、両方とも修正純資産に計上すべきとの結論に至りました。第一フロンティア生命のEEVの総額に影響はありません。このスライドでは、前年度の実績も新基準で計算し直した比較可能なベースで掲載しています。
- 以上で第2四半期決算についての説明を終了します。なお、11月24日には社長の渡邊が経営戦略やEVについてアップデートさせていただく予定ですので、是非ご参加下さい。

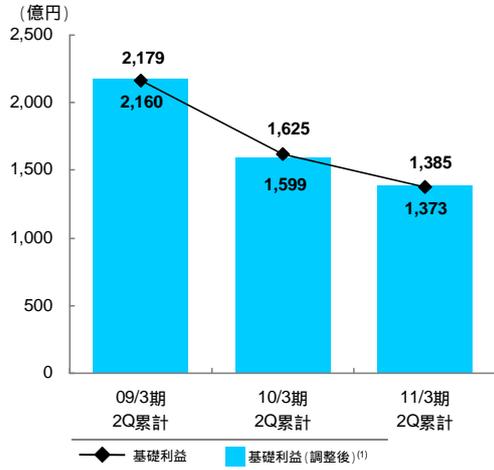
いちばん、人を考える会社になる。

第一生命

参考データ

第一生命(単体)基礎利益

基礎利益



基礎利益(調整後)の変動要因⁽¹⁾



(1) 基礎利益(調整後) = 基礎利益 + 変額年金の最低保証リスクに係る責任準備金繰入額

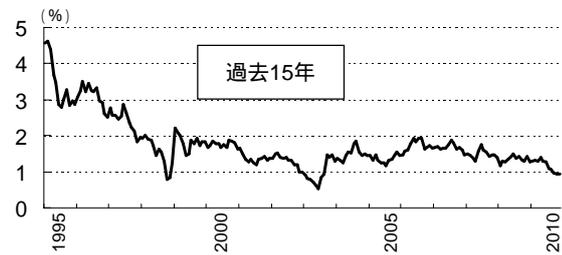
EEV感応度(10/3末時点)および10年国債金利の推移

EEV感応度(10/3末時点、第一生命グループ)

10年国債金利の推移⁽¹⁾

(億円)

前提条件	増減額
リスク・フリー・レート0.5%上昇	+3,459
保有契約価値	+9,660
修正純資産	6,200
リスク・フリー・レート0.5%低下	4,242
保有契約価値	10,087
修正純資産	+5,844
株式・不動産価値10%下落	3,208
保有契約価値	+84
修正純資産	3,292



(1) データ: Bloomberg

金融市場への感応度(2010年9月末)

	感応度 ⁽¹⁾⁽²⁾	含み損益ゼロ水準 ⁽²⁾⁽³⁾
国内株式	日経平均株価 1,000円の変動で 2,700億円(2,700億円)の増減	日経平均株価 ¥8,500 (¥8,700)
国内債券	10年国債利回り 10bpの変動で 1,600億円(1,500億円)の増減	10年国債利回り 1.5% (1.6%)
外国証券	ドル / 円 1円の変動で 190億円(180億円)の増減	ドル / 円 \$1 = ¥91 (¥95)

(1) 各指標に対応する資産の時価総額の感応度。

(2) ()の数値は2010年3月末の水準

(3) 各指標に対応する資産の含み損益がゼロとなる水準。外国証券はドル円換算にて算出した、為替要因のみの含み損益がゼロとなる水準。

いちばん、人を考える会社になる。

参考データ

第一生命

第一生命(単体)財務諸表

損益計算書(要約)⁽¹⁾

貸借対照表(要約)

(億円)

	10/3期 2Q累計	11/3期 2Q累計	増減
経常収益	21,425	20,943	481
保険料等収入	13,948	15,017	+1,069
資産運用収益	6,030	4,563	1,466
うち利息・配当金等収入	3,463	3,383	80
うち有価証券売却益	1,181	1,016	164
うち金融派生商品収益	56	150	+93
うち特別勘定資産運用益	1,265	-	1,265
その他経常収益	1,446	1,362	83
経常費用	20,066	19,881	184
うち保険金等支払金	12,830	12,236	594
うち責任準備金等繰入額	1,706	1,635	70
うち資産運用費用	1,300	1,908	+608
うち有価証券売却損	652	618	33
うち特別勘定資産運用損	-	756	+756
うち事業費	2,140	2,102	37
経常利益	1,358	1,062	296
特別損益	134	105	+28
契約者配当準備金繰入額 ⁽¹⁾	462	412	50
税引前中間純利益 ⁽²⁾	762	544	217
法人税等合計	243	202	41
中間純利益 ⁽²⁾	518	341	176

(億円)

	10/4始	10/9末	増減
資産の部合計	308,224	306,675	1,549
うち現預金・コール	3,976	3,613	362
うち買入金銭債権	2,898	3,092	+194
うち有価証券	239,879	241,242	+1,363
うち貸付金	38,343	37,646	697
うち有形固定資産	12,436	12,858	+422
うち繰延税金資産	3,376	3,487	+110
負債の部合計	298,221	296,904	1,317
うち保険契約準備金	278,962	280,338	+1,376
うち責任準備金	273,248	274,833	+1,585
うち危険準備金	5,270	5,360	+90
うち退職給付引当金	4,096	4,188	+92
うち価格変動準備金	1,154	1,224	+70
純資産の部合計	10,003	9,771	231
うち株主資本合計	6,046	6,300	+253
うち評価・換算差額等合計	3,956	3,470	485
うちその他有価証券評価差額金	4,611	4,146	465
うち土地再評価差額金	635	647	11

(1) 前年同期との比較を可能にするため、10/3期2Q累計については、11/3期2Q累計と同様に契約者配当準備金繰入額を計上したと仮定しています。具体的には、10/3期に計上した契約者配当引当金繰入額925億円に1/2を乗じた金額を、契約者配当準備金繰入額として記載しています。

(2) 第一生命は10/3期2Qにおいて相互会社でありましたが、中間純剰余に代えて中間純利益と記載しています。

第一フロンティア生命(単体)財務諸表

損益計算書(要約)

(億円)

	10/3期 2Q累計	11/3期 2Q累計	増減
経常収益	6,070	1,666	4,403
うち保険料等収入	5,533	1,616	3,917
うち資産運用収益	533	50	483
経常費用	6,100	1,731	4,369
うち保険金等支払金	142	396	+254
うち責任準備金等繰入額	5,624	1,081	4,543
うち資産運用費用	36	187	+151
うち事業費	264	61	203
経常損益	30	64	34
特別損益	0	2	+3
税引前中間純損益	30	61	31
法人税等合計	0	0	+0
中間純損益	30	61	31

貸借対照表(要約)

(億円)

	10/3末	10/9末	増減
資産の部合計	14,231	15,265	+1,033
うち現預金・コール	300	168	131
うち有価証券	13,135	14,115	+979
負債の部合計	13,057	14,137	+1,080
うち保険契約準備金	13,002	14,084	+1,081
うち責任準備金	12,996	14,076	+1,080
うち危険準備金	447	458	+10
純資産の部合計	1,174	1,127	46
うち株主資本合計	1,162	1,100	61
資本金	1,175	1,175	-
資本剰余金	675	675	-
利益剰余金	687	749	61

いちばん、人を考える会社になる。

第一生命

本資料の問い合わせ先

第一生命保険株式会社
経営企画部 IR室
電話:050 - 3780 - 6930

免責事項

本プレゼンテーション資料の作成にあたり、第一生命保険株式会社(以下「当社」という。)は当社が入手可能なあらゆる情報の正確性や完全性に依拠し、それを前提としていますが、その正確性または完全性について、当社は何ら表明または保証するものではありません。本プレゼンテーション資料に記載された情報は、事前に通知することなく変更されることがあります。本プレゼンテーション資料およびその記載内容について、当社の書面による事前の同意なしに、第三者が公開または利用することはできません。

将来の業績に関して本プレゼンテーション資料に記載された記述は、将来予想に関する記述です。将来予想に関する記述には、これに限りませんが「信じる」、「予期する」、「計画」、「戦略」、「期待する」、「予想する」、「予測する」または「可能性」や将来の事業活動、業績、出来事や状況を説明するその他類似した表現を含みます。将来予想に関する記述は、現在入手可能な情報をもとにした当社の経営陣の判断に基づいています。そのため、これらの将来に関する記述は、様々なリスクや不確定要素に左右され、実際の業績は将来に関する記述に明示または黙示された予想とは大幅に異なる場合があります。したがって、将来予想に関する記述に依拠することのないようご注意ください。新たな情報、将来の出来事やその他の発見に照らして、将来予想に関する記述を変更または訂正する一切の義務を当社は負いません。